

長編小説

伴野朗 大航海

下



大航海

下

伴野朗

集英社

長編小説

だいこうかい

大航海下

一九八四年 四月 二五日 第一刷発行
一九八六年 五月 二〇日 第四刷発行

定価 九八〇円

著者 伴野 朗 とももの ろう

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇一

出版部 (〇三三) 二三八一 二八四二

電話 販売部 (〇三三) 二三〇一 六一七一

製作課 (〇三三) 二三八一 二九六四

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、本社製作課宛にお送りください。送料は本社負担でお取替いたします。

目次（下巻）

エ ピ ロ ー グ	東 岸	計 略	天 方	波 濤	大 洋	決 戦	海 賊	陰 謀	内 乱	船 出
243	216	186	164	140	117	95	71	47	29	7

装丁 装画
三村 加藤直之
淳

主な登場人物（下巻）

鄭和

大航海者。

永楽帝

明三代目皇帝。

建文帝

明二代目皇帝。

道衍

永楽帝に仕える僧。還俗して姚広孝。

思真

道衍の弟子。大航海に同行。

楠木多聞

倭寇の一派、南寇の頭領。

村上義宏

多聞の右腕。多聞とともに王亨を狙う。

尉遲子良

永楽帝に仕える勇士。大航海に同行。

李挺

子良に従う怪盗。大航海に同行。

犬

妖術を使う道士。暗殺のプロ。

徐元

妖術を使う道士。暗殺のプロ。

王亨

張士誠の残党。今は海賊の頭領。

梁道明

華僑。旧港の大商人。

陳祖義

旧港の大海賊。鄭和に討たれる。

哈三

鄭和のアラビア語通訳。

華生

各国を放浪する中国人医師。

アブダ

咬啗吧に住むアラビヤ人富豪オタイバの孫娘。

長編小説 大航海 下卷

船 出

1

永楽帝が、いつから西洋諸国への大船団派遣を考えていたのか、明らかではない。

だが、『明史』に現われた大航海への軌跡を辿ると、即位直後すでにその決意を固めていたように見える——。すなわち、

建文四年（一四〇二年）九月——即位の翌々月に、はやくも使節の海外諸国への派遣を計画している。次いで、永楽元年（一四〇三年）五月、福建都司に航洋船百三十七隻の建造を命じている。さらに、同年八月、京衛、浙江、湖広、江西、蘇州などの府衛に航洋船二百隻の建造を命じているほか、同年十月にも湖広、浙江、江西に航洋船百八十八隻の改造を命じた。この年の秋、前年の計画に基づいて使節を派遣したのは、占城、真臘、琉球、爪哇、滿刺加、古里、柯枝などの各国である。

一方では、滿刺加の入朝を受けている。入貢はさらに多く、琉球、暹羅、占城、爪哇、安南などである。

永楽二年（一四〇四年）正月、京衛都司に航洋船五十隻の建造を命じたほか、さらに將來西洋諸国へ使節を派遣するための航洋船五隻の建造を福建都司に命じている。この年の使節の派遣は、蘇門答刺、爪哇であり、入貢は、占城、琉球、爪哇、真臘、暹羅などの諸国である。

鄭和船団出発の年となる永楽三年（一四〇五年）五月、浙江などの都司に航洋舟（小型の船舶のことか）千百八十艘の建造を命じたほか、同年十月には、浙江、江西、湖広、直隸、安慶などの府に対し、航洋舟千百八十艘の改造を命じ、翌十一月にも、浙江、江西、湖広などの各府に航洋船十三隻の改造を命じる、といった具合であった。

永楽帝が、鄭和に対し、西洋諸国に派遣する大船団の指揮をとるよう下命したのは、永楽三年五月己卯の日であった。この年最初の造船命令を出したころと一致している。

——鄭和に大船団の指揮をとらせる。

この構想がいつのころから、永楽帝の胸中にあったのか、さだかではない。が、「靖難の変」をもに戦った

信頼できる側近のなかで、永楽帝が、鄭和をその適任者として見込んだことは想像に難くない。

永楽帝の「決定」の一つの根拠として、史書は、一つのエピソードを伝えている。

永楽帝は、当代随一といわれた観相家の袁忠徹を呼んだ。忠徹は、若き日の道衍を異形の僧といい、劉秉忠の流れ、と観破したあの袁珙の息子で、父親に勝るとも劣らぬ観相の名手といわれていた。道衍の推挙により、永楽帝に仕えていたのである。

「近く、西洋に船団を派遣しようと思う。かつてなかったほどの大船団じゃ。その指揮を鄭和にとらせようと思うが、この議はどうじゃな？」

永楽帝は、そう質問を発してから、ちょっと間延びした高名な観相家の顔を見た。彼は、その顔をつるりと撫でてから、ゆっくりと口を開いた。

「三宝太監は、容姿といい、才智といい、内侍のうちで彼に比肩できる者はおりません。特に歩く姿は虎に似ており、声音は実に唳々としております。よく衆を束ね、帝国の威勢をよもや辱めることはありません。また、その出生から見しても、回教徒の多い西洋諸国に派遣するには、最適の人物かと察します」

忠徹は、かねてから鄭和の人柄に敬服していたので、

思った通りを述べ、太鼓判を押ししたのである。永楽帝の氣持は、これで完全に決まった。

これより先、張宝山への航海から戻った鄭和は、父馬哈只の墓銘碑の建立を思い立っていた。五月初め、礼部尚書（文部大臣）で、左春坊大学士を兼ねる大学者の李至剛に、亡父の墓誌銘を書いて貰い、故郷に建立した。

——公、字は哈只、姓は馬氏、世、雲南昆陽州の人となる。……

に始まる「鄭和父故馬公哈只墓誌銘」と題する石碑は、六百年近い歳月を経て、いまま昆陽城外の月山の上に建っている。この石碑によって、鄭和の家系が初めて明らかとなったのである。

積年の念願だった亡父の墓誌銘が完成した鄭和にとって、この大任に全力を挙げて取り組むのに、なんの憂いもなかった。

永楽帝は、副将格として、同じ宦官の王景弘を任命したが、その他の人選については、鄭和の腕を振りよいうすべて一任した。

彼は、ただちにその人選にとりかかった。と、同時に、尉遲子良を黃華山へ派遣して、南多聞の出馬を要請した。

彼に与えられた今回の任務は、この間聞かされた多聞の夢を実現するものではないか、と判断したためだった。だが、多聞の返書は、興味津々たる任務とは思っているが、宮仕えという点にやはりこだわりがあるようで、同行を婉曲に断ってきた。それを見て、鄭和は少なからずがっかりした。

多聞と、その一党が加わってくれることで、船団の戦闘力が増すことは確実である。とくに、水陸両様の戦闘のコツを心得ている「南寇」集団は、今回の航海には不可欠な存在と思われたのである。

だが、参加を断ってきた以上、どうすることもできなかった。鄭和は、全力を挙げて、大航海への準備にとりかかった。この準備のよしあしが、航海の成否に直結していることを、彼は十分に認識していた。

普通、西洋諸国への通使は、一年をメドにすればよかった。だが、今回の場合、訪問する国の数が多い。最低二年、最悪の場合は三年を越える航海を覚悟しなければならなかった。そのため、準備は、万一の場合を考慮して、細心の注意を払う必要があった。

彼は、どのくらいの人員を動員したのか……。『鄭和家譜』に残る使節団の人員編成は次の通りである。

欽差正使太監七人、副使監丞十人。少監十人。内監五

十三人。都指揮二人。指揮九十三人。千戸官百四人、百戸官百三人。舍人二人。戸部郎中一人。鴻臚寺序班二人。陰陽官一人。陰陽生四人。医官医士百八十人。旗校、勇士、力士、軍力、余丁、民艚、買弁、書手二万六千八百三人など。計二万七千四百一十一人。

『明史』鄭和伝の記述の派遣人員二万七千八百余人とは、四百人ほどの誤差があるが、正式人員と認められない従者なども、鄭和伝には含まれているものと見られる。

とはいえ、三万人近い大人数の海洋移動は、これまでの歴史にない、一大壮挙であった。フビライ汗が、元寇のさい、日本へ十万という大軍を送りつけたことはあるが、距離の点において段違いである。

人員編成のなかの、都指揮、指揮、千戸官、百戸官は、戦闘指揮官である。また、戸部郎中は、主計担当官であり、鴻臚寺序班は、外交担当官である。陰陽官生は、天文を見、卜筮を占う専門職である。

この編成を見てもわかる通り、鄭和は専門技術部門の充実をはかったことは明らかである。百八十人の医者、の乗り組みは、大海原を航行する者にとって、どれほどか心丈夫であったことか。このほか、舵工（操舵手）、火長（航海士）、班碇手（碇掛）、水手（水夫）、鉄錘工（鍛冶工）、木鮫工（大工）、椗林工（帆柱掛）などの専門職

を多数乗り組ませていた。

また、鄭和は、買弁、書手、余丁などの事務・庶務要員を多数加え、縁の下の力持ち的の仕事に従事させた。

兵力の実数はわかかっていないが、万を下らない精鋭部隊を乗り込ませていたことが予想される。なぜなら、遠く海外にあつての兵力の損耗は、おいそれとは補充できない状況にあるからである。

鄭和は、指揮に尉遲子良と李挺、陰陽生に思真を加えた。気が知れている者を要所要所に配しておくことは、困難な状況に出会った場合、測り知れぬ効果を生む。

船は、龍江宝船廠（ほうせんたう）ですでに完成していた。鄭和の船団は、「西洋取宝船」と呼ばれることが多い。西洋に下り、交易によって宝物を取得して来る船、つまり、交易船的性格を濃厚に反映している。だが、その一方で明の国威発揚の任務も合せ持っていたのである。それはともかく、宝船廠に面した長江に浮んだ大船団の偉容は、まさに眼を圧するばかりの威観であつた。

プロローグで前述した通り、船長四十四丈、船幅十八丈——つまり長さ百五十メートル、幅六十二メートルの八千トン級の木造船が六十二隻も並んでいるさまを想像してみればよい。言葉での表現を超えた圧倒感が見る

者の胸にひしひしと押しかかってくるのである。

この作業のために、宝船廠では永楽帝の即位直後からフル操業が続いていた。船材である杉と松などの大木は、湖広、四川、貴州など長江上流から筏に組んで運ばれていた。筏の列はひきも切らず、次から次と流れ着いた。また、舵部分は、特に堅い木材が使用され、鉄力木——鉄梨木ともいう——が用いられた。これはインド、ビルマ、ベトナム方面に産する木材で、非常に高価なものであつたが、これもどんどん運び込まれた。

当時の中国で建造される大型船の特徴を挙げると、次のようになる。

船の平面形が四辺形をなし、その結果、船首材、船尾材、竜骨（りゅうこつ）がなく、船体を強固なものにするための隔壁構造を持つていた。また、ほぼ平らな船底とほぼ四角の横断面を有していた。

推進手段については、自動反転推進具である播櫓（はろ）を持ち、技術的には欧州よりはるかに進歩していた。もう一つの推進手段である帆と帆装についても、欧州より秀れ、多くのマストを持つ多櫓船（たろせん）であり、風上へも走行することができた。

操船についても、舵の発明など操船装置で大きな進歩を遂げ、船体被覆や装甲板などを実用化する工夫が生か

されていた。

このような特徴を踏んまえた大型の航洋船が急速に発達したのは宋代から元代にかけてで、他の国々では想像もできないような大型船が建造されていた。

朱或の『萍洲可談』(一一一九年)には、当時の航洋船について次のような描写がある。

——この船は、長方形をした木製の穀物用の舢のような四角に建造されている。風がなければ、動かない。マストはしっかりと立ち、帆がそこに上げられる。(中略)航洋船は幅及び深さが数十尋(一尋は約一・六メートル)はあり、大型船ならば数百人を乗せることができる。

またベネチアの旅行家マルコ・ポーロは、インド航路の中国の航洋船について、こう語っている。

——これらの船舶の造りは、次のようにできている。まず、船材は樅と松とを使用する。甲板は一層で、この甲板の上に普通なら六十の船室があり、船室ごとに商人一名が楽に過せるようになっていゝる。舵は一つ、マストは四本が通常であるが、往々にしてそのほかに必要に応じて自由に立てたり、倒したりできる補助マスト二本を予備している。

——なお、また大型船になると、頑丈な板をしつか

りと継ぎ合せて十三の水槽、つまり十三の艙房が船体の内につくられているから、万が一にも船が岩礁に衝突したり、あるいは飢えた海豚の一撃をくらって、船体の一部が破損したとかの事故に会い、思いがけない裂孔が船腹に生じた際などには、この裂孔から流れ込む海水が、いつも空のままにしてあるこれらの艙房に注ぎ込む仕組みにしてあるのである。

隔壁構造について、ポーロの記述は、なおも続く。

——船体の堅牢をはかるための構造について説明すれば、これらの航洋船は、どれもみな二重造りである。すなわち、二層の厚板を船体の周囲にぐるりとめぐらしている。この二重の外郭の間隙には、内側も外側もぎっしり物を充填した上で、鉄釘を打ち込み、緊着させている。

また、乗組人員、積載量などについても、

——これらの航洋船には、その大きさに応じて最高三百人から、以下二百人、百五十人等々の水夫を乗り組ませているし、積荷の量もわれわれ欧州の船を凌駕し、多ければ六千籠、普通五千籠の胡椒を積載している。

ポーロの眼が、鋭く、正確であることに驚かざるを得

ない。

このほかに、当時の中国船は、大型船なら二、三艘の小型船を曳航して航海することが普通であった。一年間の航海を終えた船は、必ず修理され、四回目の修理を最後に以後は廃船とされたことなどがわかっている。

前述した宝船廠跡から出土した舵軸を研究した周世徳氏によると、鄭和船団の取宝船は、「沙船」と呼ばれる型の船であった。

沙船は、福船、広船、烏船などとともに、中国帆船の四大船型の一つで、航洋船は、この型のもが多かった。その特徴は、大型、平底、多櫓——四ないし五本のマスト——、船首と船尾は四角で、尖っておらず、船長の割には船幅が大きく、竜骨がない。構造的には、横隔壁をいくつも持ち、喫水は比較的浅い。

ずんぐり型で、速度はややおちるが、悪天候に強く、逆風のなかでも航行が可能である利点を持っていた。台風が多い南シナ海や、インド洋の颶風のなかを進むには適した船といえた。

ちなみに、沙船の発祥地は、長江河口の崇明島で、当時「崇明沙」と呼ばれていたことに由来するという。元代から明代初期にかけて多数建造され、主として江南から穀物を北方に運ぶのに使われていた。

鄭和は、自分の乗船する一号船を、故郷にちなんで『昆明』と名付けたが、あとは二号船、三号船……の名称で呼ぶことにした。十号船までが、「大八櫓」で、あとは二八櫓の船であった。大八櫓は、大きな八丁の櫓を補助推進力とする船のことである。

用意する物資も莫大な量にのぼった。

交易の主役は、絹製品、陶磁器、鑄造物であった。絹製品は、明代に入って技術がますます改良され、品種が多くなったばかりでなく、色もより鮮明になり、製品が一定の規格を保てるようになっていた。

『博物要覧』記載の陳元龍の『格致鏡原』によると、当時の代表的な絹製品は次の通りである。

紫宝階地錦、紫大花錦、五色單文錦、青綠單文錦、紫鴛鴦錦、紫百花童錦、紫珠焰錦、紅雲霞鴛錦、青樓閣錦、褐方円白花錦、柿紅龜背錦、樽蒲錦、宝照錦、方勝練雀錦、緩帶錦、八花暈錦、細花盃鴉錦、獅子錦、水藻戲魚錦、紅遍地雜花錦、紅七宝金童錦、倒仙牡丹錦、白地龜紋錦、黄地碧牡丹方勝錦、白鴛綾、碧花綾、瀟頭水波紋綾、双雁綾、方棋綾、枣花綾、白毛綾、白鷺花綾、白鴛雀綾、栗地綾、皮球綾……

陶磁器も明代初期にすばらしい発展を遂げた。柴窯

定窯、竜泉窯など有名な窯が出たが、中国の代表となったのは、江西饒州府浮梁県景德鎮の饒窯であった。宋真宗の景德年間に鎮が設置されたことからこの名が出たが、明初の景德鎮の磁業は、海外からの大量需要によって、飛躍的に発展した。紙のように薄く、鈴のように軽やかに響く景德鎮磁器の基礎は、この時代に確立した、といつていい。

高熱に耐える上薬の開発によって、五彩葡萄紫、青花低薄酒琺瑯、五彩青小碟などの傑作を産んだ。

また、鑄造物も、広州・仏山の鉄鉞山の開発によって良質の鉄が得られ、大きな発展を遂げ、釘、針金なども鉄を持たない海外諸国への重要な輸出品となった。

次に重要なのが、二万七千八百余人のほぼ二年半にわたる食糧、衣服、生活用品を整えることであつた。食糧は、生鮮食品や水は、寄港地で補給するとしても、中国人の食事に欠かせない油、味噌、醤油、岩塩などは十二分に積み込む必要があつた。さらに、米、小麦粉、大豆などの穀物も吟味して購入した。

鄭和は、この買付けに、戸部郎中——つまりいまの大蔵官僚を大量動員して当たさせた。太監とはいへ、宦官に過ぎない鄭和に、「欽差正使」としてそれだけの権限が与えられていたのである。

2

永楽帝は、陰陽官林貴和りんきわの卜筮によって、鄭和大船団の出使の日を、六月己卯の日、つまり十五日にと定めていた。

下命からわずか一ヵ月後であり、これでは到底用意が整わない。だが、これは、あくまで名目の出使の日であり、実際の出港は、東北の季節風を利用してできる十月以降であつた。

鄭和は、この日数を準備万端を整えることに当てた。これら物資の買付けが、航海中の待遇に反映し、乗組員たちの士気にかかわりがあることを、彼は計算していたのである。

実際の出港日時は、鄭和の裁量に任されていた。陰陽官林貴和は、天文もよくするので、彼の判断も加味して、出港を十月十七日と決定した。その決定は、永楽帝によって認可され、正式に決まつた。

出港を五日後に控えた十月十二日。永楽帝はひそかに鄭和を呼んだ。

「今回の航海の目標は、わかつていような——」
永楽帝は、長い髭をしごきながら、間もなく人類史

上未曾有の大航海に乗り出すことになる男の顔を見た。

「陛下のご理想であらせられる世界帝国建設への第一歩か、と推察しております。すなわち、西洋の諸外国にわが明帝国の実力を誇示し、朝貢を促すとともに、陛下のご威光を四海に照すことかと心得ます——」

鄭和は、きわめて淡々と話した。気負いはいささかもない。だが、その弁舌は、爽やかで、明解であった。聞く者の心を明るくする不思議な要素を持っていた。

「うむ——」

永楽帝は、一つ大きく頷いた。

「朕は、父陛下の過ちを正したい。宋代より元代にかけて、わが国の海外貿易事業は発展の一途をたどったが、帝国成立後、太祖は海禁政策をとられ、貿易を朝貢形式にのみ制限された。元末の大乱を鎮められた直後のことでもあり、国内の混乱を思えば、いたし方ない措置ではあったが、いま惟るに、時代の流れに逆行するものであったといわざるを得ない。朕は、いまそれを是正するために汝を西洋に遣わすのである」

これは、永楽帝としても、公言を憚る言葉であった。太祖を公に非難することは許されない。だからこそ、腹心の鄭和に大船団を委ねたのである。だが、この本音はぜひとも彼の耳に入れておかねばならない。そこで、出

発前の忙しい時に、わざわざ一人だけを呼び出したのである。

——いまの時代に海禁策はおかしい。

燕王時代から、そう思っていた。だが、海禁策は、「祖法」であり、帝位についたからといって、ただちに変更できる種類のものでもなかった。彼としては、太祖の設けた枠組の範囲内で、海外貿易を發展させるしかなかった。

——そのためには、どうすればよいか。

大船団の使節を海外諸国に派遣して、帝国の強大さを知らしめると同時に、中国の特産品のすばらしさを認めさせ、中国との貿易が得になることを肌で感じさせる必要に気付いたのである。

これなら、朝貢貿易の枠内で海外貿易を發展させることができる。

永楽帝の意図は、それだけではなかった。国内でさまざまな物資に対する社会的要求が異常に高まり、朝貢国のもたらずものに満足できなくなっていたのである。国内の諸産業が三十年にわたる安定によっていちじるしく發展したための結果でもあった。

需要は主に、宝石類と香料であった。香料の使用は、国民生活のなかに根をおろした感があり、為政者として、